

# 奈良言友会会報

# まほろば



宇陀市向洲の龍王ヶ淵

## 第28号

令和2年12月発行

## 山崎先輩

山崎貴浩

奈良県の県民性で真っ先に挙げられるのが「のんびりしている」ということである。大学進学率とピアノ保有率以外はほとんどの統計指標が全国最低レベルである奈良県だが、何か上位にくる指標はないかと奈良県庁が必死に探してやっとみつかったのが「自殺率」が全国最低という指標である。やはりのんびりしているということになるのかも知れない。特に私が育った大和三山が見える地域の人間はのんびりしている、ウルトラ保守的だということがよく言われる。

今は昔。私は国立大学の受験に失敗して不本意ながら私立の大学に通うことになった。その大学はマンモス校といわれる学校の一つで生徒は全部で2万人もいた。学生が2万人もいると大学は個々の生徒にはほとんど構ってくれないし、扱人も非常にぞんざいである。一般教養の授業では登録した全生徒が出席すると教室に入りきらないのだから大学も初めから割り切っているとしか思えない。生徒も大学に何かしてもらおうと思ったら自己主張しなければならない。おとなしくしていたら米びつの中の一粒の米のように埋もれてしまって自分の存在感の無さに呆然としてしまう。今、人生を振り返ると、この私立マンモス大学を経験したというのは私にとっては非常に良かったと思っている。一つは、世の中は広くて色々な人間がいるということ。二つは、相手が何かしてくれるのを待つのではなくて自分から行動しないと何も始まらないということ。を理解したからである。(ちなみに、私はそれから10年後に某国立大学にも入学したのだが、大学が学生をすごく大事にしてくれるのでとても感激した半面、大学生がこんなに甘やかされて大丈夫か?と思ったものである。)マンモス校だったので、当然にというか、幸いにというか奈良の田舎で育った私にはびっくりするような生態の学生にたくさん出会うことができた。今日はその中の一人で、結果的に私の吃音改善に大きな影響を与えてくれた、ある先輩について書きたいと思う。

大学ではワングル系のサークルに入ったのだが、そのサークルの3回生に私と同姓の山崎さんという先輩がいた。外見はすらりとしていて容貌も萩原健一を彷彿とさせるような美形なのだが、非常に豪快な人だった。例えば、下宿に遊びにいくと狭い6畳にりっぱなピアノが置いてある。おそろおそろその理由を尋ねるとデートで楽器店に立ち寄った時に店員にそそのかされてローンで買ってしまったという…。ワングルなんで月に1回くらいは山に行くのだが、山崎先輩はある山で「これが道だ!俺の後ろに道はできる」と言い切り、道無き山中を突き進んだ結果、帰れなくなってしまって遭難騒ぎになり、サークルは大学から半年間の謹慎を食らってしまった…。そういったエピソードが山ほどあるという無茶苦茶な先輩だった。山崎先輩のもう一つの特長は話が非常にうまいということだった。うまいどころではない、のんびりした奈良育ちの私が脅威を感じるくらい、これまで見たこともない、このような人間が居るのか?というくらい能弁なんである。山崎先輩は埼玉の出身だったのできれいな?関東弁でそれこそ立て板に水の如く話す。またその話が面白いことこの上ない。話し上手は聞き上手とも言われるが、山崎先輩は相手の話なぞ一切聞かない。それでいて何時間聞いても飽きないのである。学生食堂で一緒に昼御飯を食べ、そのまま授業をすっぽかして日が暮れるまで山崎先輩の話をみんなで聞いている、なんていうことも度々あった。山崎先輩の話を聞きながら吃音の私は「私もいつかこのように話せる日が来るのだろうか?」とか「こんなに話せたら人生楽しいだろうな」と思わずこぼれられなかった。それで知らず知らずのうちに山崎先輩の話し方を観察することになったのだった。私はそれまで自分が吃音だから

周りの人は私の話をあまり聞いてくれないのだとずっと思い込んでいた。山崎先輩を観察する中で、私の話が人を惹きつけないのは吃音が理由ではないことによりやく気づいたのだった。私には相手を楽しませてやろうとか喜ばしてやろうというサービス精神がまったく足りていなかったのである。私の話の内容は、私はこんなことをやった、あんなことを経験した、どうだ妻いだらうと武勇伝のように自己顕示の話が中心で、それでも失敗した話でもあればともかく落ちのない話ばかりなので、聞く側にしたらなんの面白味もなかったのである。二つ目は、話には落ちを付ける必要があるということである。今でこそテレビの影響で「落ち」という言葉が一般化しているが、当時はなんとなく概念としてはわかっていたくらいで、まだこの「話の落ち」という言葉はなかったと思う。「落ち」というのは何も面白い結末ということではない。起承転結の「結」ではなくて「転」の部分、相手の意表を突くということではないだろうか。落ちが別に面白くなくても意外性があれば話は聞いてもらえるということがわかった。三つ目は、話し方に抑揚をつけるということ。山崎先輩は外見も俳優みただったが話し方もまた俳優のようで、さらには身振り手振りも交えてそれはそれは派手だった。そんな話し方をするのは自分の性格を変えるようで急にはできないことだと思う。昨日まで大人しく冷静な口調で話していたのに今日から身体全体を使って大仰に話すということはなかなか難しい。私も学生時代は山崎先輩のような話し方は恥ずかしくてとてもできなかった。しかし今は場面によっては割と楽しみながらやれるようになっている。山崎先輩が話すときのひた向きでがむしゃらな姿が目には焼き付いているからである。四つ目、少しらしいの誇張は許される？ということ。話が面白い人の共通点として、話が大げさということがある。話が盛り上がってくれば誇張が伴うのは当然？であり、実害がなければそれは許してもいいのではないか。例えば、偶然出会った女性の話をするとしよう、その女性が目の覚めるような美人だったということにして話が盛り上がるのであれば、それが事実ではなくてもそれくらいの誇張は許されるのではないかということである。私もその場にいれた何気ない日常の出来事が、山崎先輩が話すともまるで千載一遇の珍事ようになってしまうことがよくあった。同じ出来事を私が話していたら何の変哲もない平凡な些事になっていただろう。これも先輩を観察した中での私の思いである。

さて、残りの紙面も少なくなってきたので、「落ち」にかからなければならぬ。落ちの話は山崎先輩の能弁が災いに転じた話である。その日、先輩と私は夜の街で大いに飲み、ぐでんぐでんになって先輩の下宿まで歩いて帰っていった。先輩は自転車に乗っていたので私の前をフラフラしながらゆっくり進んでいた。もう少しで下宿に着くという、とある辻で暴走族がたむろっていた。当時は暴走族の全盛期である。豪快な山崎先輩はその暴走族に向かって自慢の能弁で説教を垂れ始めたのであった。っていうか私は少し後ろを歩いていたので正確には聞き取れていない。「おめえら何やってんだよ～。人生はなア・・・」までは聞こえたがそこから後はわからない。なぜなら先輩は暴走族に寄ってたかってぼっこぼこにされたからである。私が慌てて駆け寄って「すいません。やめてください！ せんぱ～い大丈夫ですか？」と謝りながら馬乗りになっている暴走族の兄ちゃん達をやっと引きはがして最後に先輩を助け起こしたときには、先輩の顔はもうラグビーボールのようにパンパンだった。そこまで顔が腫れると御飯を食べることができない。翌朝、私は口を開けることのできない先輩のためにうどんを作って、口の端からうどんを一本ずつ流し込んで下宿を後にした。

世の中は広い。色んな人がいるものである。山崎先輩を見てそう思った。

小学2年のとき、どもりの友だちのマネをして、自分もどもりになってしまいました。小学校時代はどもりでいじめられたり、からかわれたことはありましたが、中学ではそれはありませんでした。中学時代はすでに世は単脚特色が濃くなっていて、周囲は、ひとをからかうような気持ちの余裕がなかったように思います。

昭和16年旧制郡山中学校に入学。学校も国防教育や軍事教練など軍事一色でした。19年3月の学徒動員令で中学生はみんな軍需工場に動員されることになり、5月から名古屋の三菱電機の工場に配属されました。昼食は腐りかけの蒸しイモ、ヒエやアワの入ったメシなど食事も貧しく、勤務もつらかったけれど、寄宿舎から工場への3キロの道を毎日軍歌を歌いながら、元気に通いました。

戦争がはげしくなってきた19年8月、アメリカに負けてなるものかという強い気持ちから、特攻隊に入りたいと思って、特別学徒隊候補生を志願しました。昭和20年2月、中学5年(17才)のとき、志願が認められましたが、目があまりよくなかったので、飛行機の操縦には向かないということで、加古川市の陸軍航空通信学校に配属されました。学校と言っても、軍隊そのものでした。配属されたその日、中学校の制服をぬいで、軍服に着替えると、一列に並ばされ、軍人としての精神を注入すると言われて、いきなり全員がビンタをくらいました。その後、軍人教育はビンタの嵐だということを思い知らされることになりました。兵舎に寄宿することになりましたが、「かわや(厠=便所)」や「ぶっかんば(物干場)」など兵舎の外に出るときは、内務班の班長に申告しないとダメです。大声で「いなうえ候補生、かわやへ行って参ります」と大声で申告し、「よし!」という返事をもらってはじめて行けるのです。申告する前はベッドの横にじっと座って、気を静めてから立とうとしましたが、うまくいきませんでした。「いなうえ」の「い」が出てこないのです。すると「どうした!」「きさま、なんのために立っとるんだ!」と怒鳴られる。必死でどもりながら言うと、「言い方がなっとらん」と皮のスリッパで往復殴られました。「よし」と言われないと外に出してもらえないので、出るのをあきらめて中にもどってしまうこともよくありました。「かわや」は必死で申告しましたが、洗面所へはなかなか申告する気にならず、3か月、歯を磨きませんでした。むろん殴られたのは自分だけではありません。毎晩、みんなそれぞれの欠点を指摘されてびびり殴られました。夜9時消灯なのに10時ごろまで、ある者は殴られ、ある者は銃をもったまま立たされ、或る者は柱によじ登ってセミのマネをさせられました。10時ようやくベッドにもぐりこんで、カーテンを少し開けると、夜空に月が見えましたが、月をみると、母親が恋しくなり、「お母さんが『友だちのどもりのマネをしたらあかん』で言うと思ったのに、マネしてどもりになってしもうて、それで毎日殴れとるんや」と言って泣きました。みんな17~8才の少年です。みんな泣きながら「お母さん、迎えにきてくれ」「お母さん」「お母さん」と泣いていました。

そこでは、仲間からどもりでからかわれることはなかったけれども、「稲植がもの言わんのは、きさまらに責任があるんだ」といって、全員がなぐられたことが二度ほどありました。

どもりのためにずいぶんビンタをくらいましたが、私以上にひどいビンタをくらった戦友もいました。彼は、空腹のため残飯に手をつけたのが見つかって、猛烈なビンタをくらひ、あごが外れて三日間食事ができませんでした。

ここでの体験は言葉で尽くせないつらい体験でしたが、戦友たちにとっても同じだったと思います。

通信学校で終戦になり、どもりによって受ける苦痛からやっと解放されました。戦争が終わって本当によかったと心底思いました。現在、当時の戦友が5人いて、ときどき会っています。戦争は絶対にしたらあきません。

## <インタビューのいきさつ>

10年ほど前、当時、全言連の理事長であった綾部 泰雄さんに、奈良言友会に軍隊経験のある人がおられることをお話したとき、それは貴重な体験だからとインタビューして記録に残すことを勧められました。私にも同じ気持ちがあったので、実施することとしました。稲植 英和さんは昭和2年生まれで、当時84才。奈良言友会発足（2011）の当初から例会に参加しておられました。

2011年12月のある日、奈良市ボランティアインフォメーションセンターの会議室でインタビューしました。堀がお話を聞き取り、内容をまとめたのがこの文です。稲植さんにはこのインタビュー記録を言友会の機関紙などに載せることを了承していただきました。戦後、稲植さんは、国鉄（今のJR）の大阪鉄道管理局に勤務。定年退職後は、地域社会のために尽力され、長年、JR奈良駅前の町内会長、人権教育推進協議会の会長、保護司などを勤められました。

## 朝ドラ「エール」を見て

堀 茂

このドラマの主人公、小山裕一のモデルは昭和を代表する作曲家のひとり、古関裕而です。

古関の作った歌が好きだったこと、また古関に幼少から吃音があったことが描かれ、このドラマを楽しみにして見てきました。

「長崎の鐘」や「オリンピック・マーチ」が大好きでしたが、古関の曲とは知らずに口ずさんでいた歌も多くありました。戦時中は軍歌も作って世に送りましたが、そのことに責任を感じて悩み、しばらく曲を作らない時期がありました。戦後をはじめて作ったのが、戦災孤児のことを描いた連続ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の主題歌でした。その後、長崎で自身も被爆しながら人々の治療に当たった医師の手記をもとに「長崎の鐘」を作りました。たいへんに美しい、心にしみる歌で、二番の「・・召されて妻は天国へ・・」のところでは泣きそうになりました。

私にはたったひとつ戦争の記憶があります。富山市に住んでいた昭和20年8月1日の夜、B29の大編隊が富山を襲いました。市街地は一夜で焼け野原となり、たくさんの方が亡くなりました。3才前だった私は、庭の隅につくった防空壕に母に手を引かれて避難しました。裸電球の下で家族が身を寄せ合った情景が記憶の底にあります。

戦後の記憶では、路地や空き地で走り回って遊ぶたくさんの子どもの姿がまっさきに思い浮かびます。お菓子のない時代、新聞紙で砂糖をひと掴み包んでもらって外に遊びに行き、夕方、家に戻るとラジオから「・・みどりの丘のあかい屋根・・」と鐘の鳴る丘の主題歌が飛びこんできました。子どもたちに大変人気があり私もよく歌いました。

ドラマでは裕一の少年時代が描かれます。裕一は、心優しいが、引っ込み思案な子どもでした。裕一に音楽の才能があるのを見出した藤堂先生は、迷ってなかなか一歩が踏み出せない裕一に「やらずに失敗するより、やって失敗する方がよい」と言って、裕一の背中を押します。この言葉はドラマの大事な場面に何度か出てきて、私にいろいろな思いを呼び起こしました。

私は引っ込み思案な子どもで、ここは裕一に似ているかもしれません。若い頃、どもりを治したい一心で、民間矯正所で発声発語練習に励みましたが、治らなかったで、一大決心をして、どもりをもって人生やっていこうと思いました。しかし人前で「どもりそうだ」と思うと、往々にして言わずじまいになることがありました。このことは私を悩ませただけでなく、ひとを困惑させ、周りに迷惑をかけたと思います。どもることに限らず、何かをしようとして、「失敗したらどうしよう」と思うと、やらないことが少なくなかった。失敗を怖れて、しなければ前に進めない。たとえ失敗しても、やったことは、あとに繋げることができる。人生、前向きにいきたいと思って、長年、あれこれ考え、いろいろなことをして、苦労したなあと思ひ返します。

## 例会報告 4月から6月はオンライン例会

1. コロナウイルスの感染拡大を防止するため、4月から例会会場のボランティアインフォメーションセンター（以下センター）の会議室が使用できなくなり、奈良ではとりあえず4月12日に予定していた親の会との交流会は延期することになりました。各地言友会でも事情は同じで、ほとんどの言友会で対面による例会は中止となりました。そして、多くの言友会では、新たな試みとして、在宅のまま参加できるオンラインでの例会を行なうようになりました。

奈良言友会でも4月17日午後20時より約1時間、ビデオ通話を使って、初めてのオンライン例会を行ないました。参加者は7名で、このコロナ禍による日常の変化、仕事への影響など自由に話してもらいました。また、今後の活動の見通しも話し合い、5月10日に予定していた「青紅葉を見る会」も中止としました。

2. 多くの言友会でオンラインによる例会が行われるようになりましたが、各地言友会では新しく開発されたzoomを使って行うところが多くなっていました。対面による会議に近い臨場感もてるzoomによってやってみないと、後藤さんのリードでzoomの練習会を4月26日と5月3日に行いました。

3. センターの会議室の使用中止は6月まで続くため、5月、6月は引き続きビデオ通話により行なうこととしました。5月17日（日）午後1時半から約1時間程度の例会を行いました。参加者は5名、体験炎や見聞きしたエピソードなどで行ないましたが、コロナ禍中での会運営についての意見、外出制限や仕事への影響などについての話も多く出ました。

4. 6月14日（日）午後、参加5名で、それぞれから話題を出してもらって自由に話し合うことにしました。またメンバーから、全言連から出されている新団体構想について、よく分からないとの意見があり、全言連ニュースの載っていたその構想の記事をもとにして話し合いました。

5. 上述のように4～6月はオンラインによる例会を行ないました。コロナ禍のため会場が使えなくなったが、なんとか集会を続けたいとのみなさんの意向があっただけで始まったものですが、在宅のまま参加できること、対面での集会よりも話しやすいという人もあるなどで、3か月間行なうことができました。

7月からセンターの会議室での例会が始まりますが、今後も会運営の都合が必要になったときなどに在宅のまま参加できる、あるいは都合でセンターでの会合に参加できなくても、オンラインでなら参加できるなど、今後もオンラインを活用できると思います。今後はzoomを使ってミーティングができるようにしたいと思います。

## 主な例会報告

7月12日（日）13:30～16:30 参加 6名

第1部 サイコロトーク 担当・報告 澤辺 佑一

今回はサイコロトークをやりました。サイコロを振って出た目の話題でスピーチします。以前に三島さんがやられて個人的にすごく面白かったのでこのアイデアを使わせていただきました。テーマを変えればいろいろたくさん出来ると思います。今回はテーマを考える時間がなかったし、思いつかなかったのが好きなもの、嫌いなものを中心になりましたが、みなさんの好きな・嫌いなのが知れて良かったと思います。参加人数が少なかった為1人2回ずつになりました。次にやる事があればまた別の面白いテーマを考えておこうかなと思います。そして参加人数も多ければもっと楽しくなるかなと思いました。

○サイコロの目の話題

好きな（嫌いな）食べ物、スポーツ、芸能人、番組、動物

過去に戻れるとしたら、いつがいい？

<感想>

○お互い色々な話が聞けるのでよいと思う。テーマも色々なパターンがあるので、今度やってみたいと思った。O・K

○サイコロトークはなかなか面白かった。M・G

○これからもテーマを変えて、いろいろな話ができると思う。みんなのいろいろな話が聞けてよかった。S・Y

○サイコロトークは思いつくままにだらだらとしゃべってしまう。もっとまとめて簡潔にしゃべるようにしたい。H・S

○それぞれのテーマに従って、話をまとめるのはスピーチの勉強になっていいと思います。Y・T

## 第2部 私の体験談 担当・報告 岡本 和真

私は、去年の6月から奈良言友会の例会に参加しています。後半で吃音体験について話しました。吃音体験を話すことで自分自身の悩みをわかってもらえる良さがありました。また、自分の吃音体験を話して、他の人のエピソードを聴き、吃音の理解を深めることができました。吃音体験を話す機会をいただきありがとうございます。下に当日配布したレジメを提示します。

吃音体験レジメ 岡本 和真 1992(平成4年)生まれ 27才

- ・小学校 1年生、全然笑わない子どもで先生が心配する。  
2年生ぐらいまでは、ほぼ誰とも話さない。友達もない。  
3年生、数人の友達ができる。その友達以外とは、ほとんど話さない。
- ・中学校 小学校からの友達以外とはほとんど話さない。
- ・高校 クラスではほぼ話さない。クラブ活動(弓道部)では話をするが、部員からは無口であると思われていた。
- ・大学 クラブの部室でつまることがある。高校時代に比べれば誰とでも話せた。
- ・大学卒業後、1年間就職しなかった。
- ・現在の会社に就職。2016年(平成28)11月。24才。

入社後、徐々につまるとようになる。吃音の症状が出てくる。

最初の2週間ぐらいは、普通に話していた。

2週間を過ぎた頃から徐々に、仕事のことで、話しかけると、つまるとなる。

「は」「か」など言いにくい言葉がでてくる。数字や名前が言いにくくなる。

「すみません」など前置きを使う。身振り、手振り、言いやすい言葉を使うなど、言いやすいように色々工夫するようになる。

悩むときと、悩まない時の波があると思う。

言うタイミングを逃した時など、怒っているのではないかと、相手の気持ちばかりを考えてしまう。

スムーズに言えるときもあるし、言葉がつまる、出てこないときもある。

自分の症状をインターネットで調べて、吃音だと思う。

徐々に、悩みだし、追い込まれていく。

医療機関に行こうと思ったが、言友会という団体があると知り相談する。

2019(令和元)6月 奈良言友会の例会に参加。

言友会に参加する前に比べれば、気持ちが楽になった。

<参加者の感想>

○岡本さんの体験談はよかった。M・G

○岡本さんが僕と同じ弓道部で親しみが湧いた。S・Y

○岡本さんの体験談を聞かせてもらい、大人になってから吃音の症状が出て、悩むことがあることを知りました。吃音ということ、ことばの出はじめて症状が出るものと思い込んでいたので、貴重なお話を聞いてとても参考になりました。ありがとうございました。A・I

○無口で笑わない子どもだったとのこと。そのつらさがわかりました。H・S

○岡本さんの経験を詳しく聞いて良かった。事前にペーパーにまとめるなど、準備も素晴らしい。Y・T

○人に伝えるよう話すのはむずかしいと思った。O・K (担当)

9月20日(日) 13:30~16:30 参加4名(オンライン参加1名)

## 第1部 電話例会 担当・報告 堀 茂

参加者がペアになって、実際の場面を想定し、通話器具を使つての会話によって進行しました。

<進め方>

電話を「かける人」と「受ける人」がペアになって行います。

1回目は、「かける人」が場面を設定し、「受ける人」に電話します。互いにやりとりしながら話を展開していきます。2回目は、「かける人」と「受けた人」が交代して、一回目と同じように行ないます。

場面は「かける人」が自由に設定します。参考にいくつかの場面を挙げます。

#### 場面の例（参考）

- ・職場の懇親会の幹事になった人が会場の居酒屋に電話して予約する。
- ・公民館の講演会を聞きに行った人が会場に忘れ物をしたことを帰宅してから気づいて公民館に電話する。
- ・ある施設の厨房の職員が食品会社に食材を、翌日3時までには届けるようにファックスで注文した。指定した時間に食材が届いていないので、注文先に電話する。
- ・発注した商品と別の商品が届いたので、発注先に電話する。
- ・面白い催しがあるので、友人を誘って行こうと思い、電話する。

#### <進行>

独自に場面を設定して行なった人も、参考場面を使って行なった人も、話しの進行を考えながら、電話対話を進めていました。参考場面を設定したことで、やりやすかったようです。

#### <参加者の感想>

- 場面の例があったので話しやすかった。本番はどうなるかわからない。O・K
- 電話器を使うことによって臨場感があり、電話での受け答えの練習になったと思います。電話する例も挙げていただいたので、ありがたかったです。A・I
- とても電話例会緊張しましたが、よかったと思う。M・G
- 実際の電話をするときに、この例会の試みが役に立てばよいと思います。H・S

## 第2部 ダンギ（談義） 担当・報告 堀 茂

急きょ担当することになったのですが、とにかく楽しく話合えればよいと思い、「ダンギ」をすることとしました。提案されたテーマに従って、自由に話し合います。討論会のように「どちらが勝ち」はありません。いくつかの話題が出た後、「生まれ変わるとしたら、男がよいか女がよいか」をテーマに行ないました。男も女もそれぞれ良さがあるので、もし生まれ変われるなら女になってもよいという意見や、専業主婦に憧れているので、女に生まれ変わりたい、という意見もありましたが、現実には、仕事をもった女性は家事も担わなければいけないことが多く、たいへんという意見など、いろんな意見が出て、身につまされるところ、気づくところもあり、よい話し合いだったと思います。

#### <参加者の感想>

- 男性も女性も良さがそれぞれあると思った。O・K
- 男か女がどちらに生まれたかったか、仲間うちなので、遠慮することなく、お互いの考えが言え、そこからお互いのことも理解していけるきっかけにもなったと思います。A・I
- 後半はわかりにくいでした。黒板に書いてほしかったです。M・G
- 楽しく話合えたと思います。それぞれの男性観、女性観も出ていたと思います。H・S

奈良言友会の例会 日時：毎月第1日曜日 13:30~16:30

場所：奈良市はぐくみセンター（JR奈良駅西出口 南へ歩3分）

奈良言友会連絡先	堀 茂（ほり しげる）	わいと年配です、TEL090-9610-6393	ショートメールでも結構です。
	後藤 文造（ごとう ぶんぞう）	わいと若いです、TEL090-9161-7685	同上

奈良言友会 [naragenyukai@hotmail.co.jp](mailto:naragenyukai@hotmail.co.jp)

奈良言友会HP <http://nara-genyukai.jimdo.com/>

奈良言友会会報誌「まほろば」 編集発行 山崎貴浩

2020年度の年会費納入(11月現在) 田平隆彦、三島学、堀茂、沢辺祐一、山崎貴浩、市田浩志、天羽郁子、後藤文造